

川畑秀明

慶應義塾大学文学部

准教授

美の謎を探る、アートの脳科学。



ヨハネス・フェルメール 『真珠の耳飾の少女』(青いターバンの少女) 1665年頃 マウリッツハイス美術館蔵



ユニバーシティ・カレッジ・ロンドンの正面? 大英博物館の裏手にある。



留学時代の研究室がある建物はダーウィン・ビルディングと呼ばれ、『種の起源』を記したチャールズ・ダーウィンがかつてこの場所にあった建物に住んでいたようだ。ロンドンの主要な場所まで徒歩でも行ける。



ヤン・ファン・エイク 『アルノルフィニ夫妻』1434年 ロンドン・ナショナル・ギャラリー蔵
絵画に現れる釜みの謎など、研究のアイデアは既に絵の中にある。

アートと科学の接点を探る

私は新しいものや旬なものが大好きだが、あまのじゃくなので皆がよって集るものは敬遠しがちだ。それでも、美術展だけは別だ。人気のある展覧会では入場まで一時間以上も列になって待たなければならぬことも多いが、それでも喜んで列ぶ。美術作品に限らず、音楽や演劇などアートは生で鑑賞するのが一番だ。画集やインターネットで見ると作品を生で見るのとは感動の度合いが違う。海外に行っても一番時間を費やすのが美術館巡りだ。

これまで見た作品の中で、感動したものを挙げるとすれば、まずフェルメールの『真珠の耳飾の少女』を真っ先に挙げたい。なにしろ少女が鑑賞者に向けて視線に釘付けになり、そしてあの艶やかな質感に惚れた。もう一つ挙げるならば、ロスコのシークラム壁画などの抽象画だ。巨大な絵の前に立ち、ぼんやりと眺めていると、私は絵に包まれ、宇宙を浮遊するか母体の中にいるかのようなある種の宗教的な体験さえする。

子どもの頃から絵を描くことやデザインに興味があった。小学校の文集でファッショングラフィックになることを夢に挙げたほどだ。昔からアートに関わっていたかと思いついてきたが、実際には研究者としてアートに関われるようになった。その喜びは大きい。

留学という体験



Hideaki Kawabata

●1974年鹿児島県生まれ。鹿児島大学教育学部卒業。九州大学大学院人間環境学研究科を修了後、ロンドン大学、鹿児島大学を経て、慶應義塾大学へ。専門は認知神経科学、芸術心理学、感性教育。

大学院を修了して博士の学位を取るまでは、赤ちゃんの視覚の研究を行っていた。博士の学位というのは研究者としてのスタートラインに立つ権利のようなものだ。多くはそれまでに行った研究を基礎として自分の専門として、その後何十年と研究を続けていく。しかし、私の場合、大学院を修了して英国ロンドン大学への留学を機に研究分野を変えた。実験心理学から脳科学へと道を少しそれただけだが、問題は「神経美学」という新しい領域を一から開拓する必要があったことだ。私のボスは神経生物学の世界的権威と言われる教授だったが、晩年彼は芸術を脳の働きとして捉える試みを始めていた。

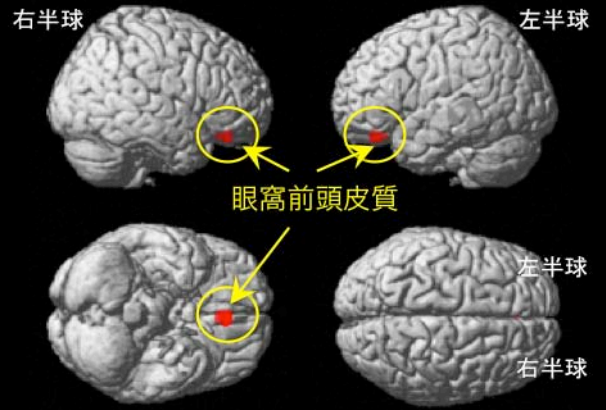
教授からは色々なことを教わった。といっても知識の伝達を受けたことは一度もなかったが、研究室への態度や姿勢を教わった。研究室では何より、研究を楽しむこと、研究への責任感、年齢や身分に関係なく他の研究者と対等に渡り合う必要性が重視された。留学生活は大変だったが、刺激に満ちていた。ロンドンには色々な国籍・人種の人たちが集まるし、古いものと新しいものが混在している。それに、外にいるからこそ日本の様々で小さなことが気になる、見えてきた。短い期間だったが、そこで得たものは一生の宝だ。

実験で使っている MRI 装置

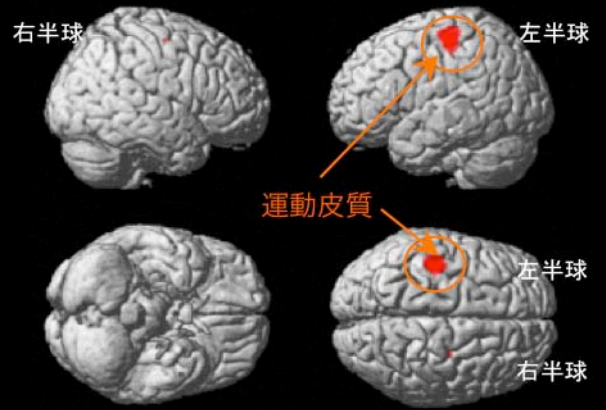


MRI 装置は大きな電磁石のようなものだ。脳の動きを調べる fMRI 実験では、人が装置の中に入った状態で様々な画像を観察したり、様々な課題を行ったりして、そのときに脳のどの場所が活動を高めるのかを調べる。

美しいと感じるときに主に働く脳の活動



醜いと感じるときに主に働く脳の活動



ポール・セザンヌ『サント・ヴィクトワール山』1904年 フィラデルフィア美術館蔵。風景画を見るときには右上のような場所が活動を高める。

絵画作品を見て、美しいと感じるとき脳の動きは、私たちがごちそうを食べて満足しているときや、ルーレットが当たりそうにワクワクしているときの脳の動きとほとんど同じだ。絵を見て醜いと感じているときには、同時に身体を動かす脳の仕組みが同時に動きだす。心の拒絶は体の拒絶の反応を生み出す証拠だ。

「美とは何か」への問い

現在、私が研究対象としている「アートの脳科学」の中でも、私の特に関心があるのは、美的な感覚や意識についてだ。私たちの好みは人それぞれだが、基本的に美しいものが好きだ。その原理を脳の仕組みや働きから明らかにしようという研究を取り組んでいる。特に、「ヒトは「何に」「どのように」「美しさを感じるのか、そして「なぜ」美しさを感じる必要があるのか」それらの美を巡る論考は古代ギリシャ哲学にまでさかのぼることができ、はるか二〇〇〇年以上の歴史がある。そのような大きな問題について「脳」を通して理解しようとしている。アートの脳科学は、哲学や美学の問題を脳科学の研究手法を借りて明らかにしていこうとする。脳に関する知識や研究技術の習得は当然のことながら、哲学や美学、さらには考古学や人類学の研究に對してもアンテナを張り巡らさなければならぬ。理系だの文系だのは関係ない。美の脳科学は、「ヒト」と「人」を問う科学だ。

最先端という意識を捨てる

私の研究では機能的磁気共鳴画像 (fMRI) という装置を用いる。ここ二〇年ほどの間に爆発的に発展した脳の可視化の技術を用いている。その技術開発は最先端の科学だ。しかし、最先端のものを使っているからといって、やっつけていることが最先端であるとは限らない。やれもすれば、そう勘違いしてしまう。私自身も最先端の研究を目指していた。アートの脳科学という新しい学問を開拓しつつあるだけに、しかし、そういう意識を捨て去ることも学問を著実に進展させるためには大切なのではないかと感じている。

一九世紀後半にパリでマネやモネらが印象派を掲げ作品を発表したときには社会では全く受け入れられなかった。その運動は画壇の主流派のアカデミズムへの反旗の意思でもあったのだが、同時にチューブ絵具の発達や写真機の発明などの時代性がゆえの必然でもあった。そして次第に社会でも受け入れられるようになり、反主流派は主流派に同化されていった。

芸術の歴史とは、常に時代の権威との対峙の歴史であり、新しい芸術がいかに旧来のものに同化・調節されるかという歴史でもある。芸術は研究と同じく常に新しいものを目指す。だからといって、最先端があるわけではない。むしろ、旧来のものから遠く離れたところを目指し、未開の地を開拓することでもしか歴史に名を残す術はない。皆が雲に隠れた山頂を目指すような仕事をするなら、逆に海という深いところを目指す、そういうスタイルを模索する。